雛祭りとは一体なんだったのか

文・iimo

春。春である。

今年は豪雪に閉ざされることもあらゆる花々が一斉に咲き乱れることもなく、至極一般的で平和ないつもどおりの春を迎えることができた。

もっともまだ三月に足を踏み入れたところで、暦上は春となっているものの風が吹けば肌寒いし、空を飛ぶともなれば防寒具は手放せない。しかし融けた雪の下からかすかに覗く草木の芽や、ぱらぱらと咲き始める梅の花や、テンションが上がりすぎたのか春告精と手を繋いで踊っている花の妖怪からも季節の変わり目を感じ取ることができる。

あとはどこぞのスキマ妖怪が冬眠から目を覚ませば完璧、といったところか。

ひとまず風見幽香の奇行については後でブン屋にでも伝えておこう。ちょっとした小遣い稼ぎにはなるかもしれない。

大自然に囲まれた幻想郷では、日本の四季をこれ以上無いほど堪能することができる。それ故季節毎の行事や祭事は人間、人外を問わず盛大に執り行われることが多い。

いずれも最後は酒を飲むわ浴びるわの大騒ぎをして翌日の頭痛と共に終了するのだが、一応形式や建前は重視するらしく、桃の節句であればどこの家もやたらと豪華な雛人形を飾り、端午の節句となれば庭という庭に竹竿が立てられ、これまた立派な鯉のぼりで空が埋め尽くされる。私の家も例外ではなく、何段にも積み上がったいかにも高級そうな雛人形を毎年せっせと設置していた。

……今思えばアレはがめて来るべきだった。もう必要も無いだろうしな。

ぼんやりと考えながら、細かな作業を続けているアリスを眺める。おそらくもう数刻もすれば完成なのだろう。疲れた顔も今は少し楽しそうだ。

それにしても……何か触れてはいけない雰囲気を感じたので黙っていたが、いよいよそ

れも限界だった。
仕上げ中のアリスに直接訊くことは躊躇われたので、まずは横で黙々と本を読んでいる奴に話しかけてみる。
「なあ、アリスは一体何を作っているんだ？」
「……見て分からない？　雛人形よ」
パチュリーはむっつりとそれだけ答え、再び本に目を落とし黙ってしまった。
なるほど、雛人形。そんなことは百も承知だ。そもそもアリス自身からさっき聞いたばかりで、それで納得していればわざわざこんなことを訊ねたりしない。
私が言いたいのは、その、なんだ、
「球体間接の雛人形があるかよ……」
今アリスが作っている物と私の知る雛人形との間には、根本的な部分で大きな違いがあったのだ。
確かに十二単のような和服に身を包み、綺麗な扇状に結った黒髪も白粉の塗られた顔もまさしく雛人形のそれかもしれない。しかし私がそれを雛人形と認識するには服装と頭部だけでは不十分だった。
まず見た目の違和感を一言で表すなら、でかい。
明らかに大きさがおかしい。普通の雛人形はいくら豪華なものであっても膝には届かないくらいの高さで、間違っても膝立ちのアリスと顔の高さが同じになるということは無いはずだ。アリスがいつも使役している西洋人形よりもさらに大きく、なまじ人体として現実味のある大きさのせいかおめかしをした女の子にしか見えない。それゆえ違和感が際立つ。正直に言えば、怖い。
百歩譲って大きさは気にしないということにしよう。例えば私が今アリスの家を訪れたのなら「おお、随分とでかい雛人形だな」で済んでいたかもしれない。

しかし困ったことに私は制作過程のほとんどを目撃しており、大きさなどは些細な問題であるということを知っていた。
「よし、あとは動作テストね。流石に服の重さが気になるけど……一応大丈夫かしら」
ああ、やっぱり動くのかこれ。
アリスが微かに指を動かすと、まさしく生きた子供のように人形が動き出した。その場でくるりと一回転してスカート……は穿いていないため着物の裾をつまみ優雅にお辞儀をする。普段の人形なら可愛らしいだろうその動きも、大きさのせいかはたまた純和風な顔立ちのせいか、ただひたすらに不気味と言う他無い。
「完成おめでとう、アリス。で、それは一体何だ？」
「朝に言ったじゃない、雛人形よ。見てのとおりの」
見てのとおり、とは……
「生憎、私の知る雛人形はそんなに大きくもなければ、歌いも踊りもしないんだ」
「別に歌ったりはしないわよ」
それは何よりだ。これで歌でも歌われた日には呪いの人形として話題になるどころか、下手をすれば里の若い衆によって討伐隊が組まれかねない。現に私は目の前で腕組みをしながら首をかしげている（多分可愛らしさをアピールする定型動作の一つだと思う）こいつを早く消し飛ばして、この恐怖から開放されたいと思っている。
しかしかし当の制作者は人形と同じポーズを取り、遠慮なく疑問の目を向けてきた。おそらく私がいかに力説しようと、何がおかしいのか理解してくれることは無いだろう。これだから妖怪ってやつは。
「わかった。色々と言いたいことは残っているが、このフルアクション日本人形は新手の雛人形ということにするよ。質問を変えよう。何故作った？」
「頼まれたからよ」
ジーザス。こんな不気味の体現とでも言うべき人形が依頼品とは。
いや、考え方によっては喜ばしいことなのかもしれない。少なくともアリスが自主的に

作ったわけでは無さそうだ。私だって数少ない友人をこんなことで失いたくはない。
「また随分な依頼だな……依頼者の顔を見てみたいぜ」
「慧音よ」
「嘘だろ？！」
　どちらかというと慧音は討伐に来る側だろう。人（？）は見かけによらないとは言うが程度の問題だ。あいつは幻想郷でも珍しく話の通じる奴だと思っていたが、考えを改める必要がありそうだな。惜しい奴をなくした。
「何よ、この世の終わりみたいな顔をして。寺子屋で毎年飾っていた雛人形が妖精のいたずらで壊されたそうよ。本来なら里の職人に頼むところが今体調を崩しているらしくて、それで私のところに依頼が回ってきたというわけ。納得した？」
「……飾る？　……これを？　……寺子屋に？」
「そうよ。何か問題が？」
「アリス、悪いことは言わない。今からでも考え直すべきだ。私が言うのもなんだが、この人形が里の子供たちの健全な精神の育成にどれだけの悪影響を及ぼすか考えt痛ぇ！殴るか普通！？」
「あんたねぇ……人の家に長々と居座り、たらふくお菓子を食べた挙句に言うことがそれ？　なに、私の人形が不健全とでも言いたいわけ？　喧嘩を売っているのかしら」
　実際会話だけを抜き取れば、私は相当酷い奴に見えるだろう。だがそれはこの光景を目の当たりにしていないからだ。
「いいわ、喧嘩は後で買うから。時間も無いしひとまず表に出て頂戴」
「やる気まんまんじゃねぇか！」
「何を言っているの？　この子の最終テストをするのよ。この際だから協力してもらうわ。ほら、早く」
　これ以上何をテストするのか分からないが、さらに機嫌を損ねても困るので大人しく玄関へついて行く。例の人形はアリスの後ろで器用にもあっかんべーをしていた。

舌、あるのか……。

アリスの家から出た私たちは建物から少し離れ、距離を取り向かい合う形で立った。既に夕方から夜に差し掛かっていて、空はほんのり赤味がかっているがほぼ暗闇に近い。窓から漏れている部屋の明かりと、アリスの持つランタンだけが辺りを照らしている。

その中に浮かび上がる人形の白い顔がやらたと気味悪かったが、見ないことにした。

「それじゃ、いくわよ。準備はいい？」

「何の準備か知らんが、多分大丈夫だぜ」

「そう、なら遠慮なく」

ゞミッ

「うおぁぁっ……あぶ、危ねぇ！　何するんだいきなり！」

「何って、撃っただけじゃない。どうしたのそんなに慌てて」

「撃たれたら慌てるのが普通だろ！」

突然視界が明るくなったかと思えば、それはかの人形の口から発せられた光線だった。条件反射で気合い避けしたが、お気に入りの三つ編みは先端が焦げ、肩の辺りにも不自然な穴が開いている。真っ直ぐ顔を狙ってくるとはえげつない。

「大きさは気にしないことにした。全身フル可動もいいだろう。何で攻撃手段まで持たせているんだよ！　雛人形じゃなかったのか！？」

「言ったじゃない、元々は妖精に雛人形を壊されたのが原因だって。だから今度は壊されないように自衛手段を持たせたのよ」

「自衛って……これは過剰防衛だろ！　お前は寺子屋を要塞にでもする気か！？」

避けられたから良かったようなものの、さっきのは当たれば普通の人間などひとたまりもない威力だった。里であんなものを発射すれば、どうなるかなど考えたくもない。

「大丈夫よ、慧音に渡す時は目くらまし程度まで出力を絞るから。さっきのは全力で撃ったけど、当たらなかったわけだしいいじゃない」
「それにしたって、私を立たせる必要は無かっただろ！　木にでも当てればいい！」
「なんだ、今更気付いたの？」
しれっと言ってのけるアリスに、流石の私も腹が立ってきた。そう、こいつは初めから私に喧嘩を売っていたのだ。そうとなれば話は早い。
「ああ分かったよ。そっちがその気なら私も容赦しないぜ」
素早くポケットから瓶を取り出し、中身をアリスと人形に向けてまとめて投げつける。ちょうど今朝家を出る前に作っていたお手製の炸裂弾だ。普段なら牽制程度の効果しかないが、今日は図体のでかい人形をかばうため完全に避けることは出来ないだろう。防御に入り動きの止まったところを魔砲でズドンだ。どちらにせよ人形は壊すことになるが致し方ない。むしろその方が里のためになる気さえする。
八卦炉を正面に構え、意識を集中させる。視界の先にはゆっくりとアリスへ迫る炸裂弾が見える。まだ早い。もう少し、もう少し……今だ！
「そこまでよ」
突如、私とアリスの間に水の壁が吹き上がり、炸裂弾を空の彼方へと打ち上げた。
意識が前方へと向かっていたため気付かなかったが、玄関先を横目で見ると魔導書を抱えたパチュリーがこちらを睨んでいる。
「おいパチュリー、どういうつもりだ。いいところで水を差しやがって！」
「何よそれ、上手いこと言ったつもり？　馬鹿やってないで、お客さんがお見えよ」
見ればパチュリーの横には申し訳無さそうな顔で慧音が立っている。
「すまない、アリス。もう少し早く来るつもりだったのだが……」
「気にしないで。ちょうど今最後のテストをしていたところよ」
人体実験だけどな、と小声でつぶやくと脛を蹴られた。痛い。

「これがお願いした人形か。うむ、素晴らしい出来だ！　やはりアリスにお願いしたのは正解だったよ。ありがとう」
「どういたしまして。喜んでもらえて嬉しいわ。日本の人形は作るのに不慣れだから、変なところとかあったらごめんなさいね。あと防衛機能で使用する魔力を蓄えるため少し大きくなってしまったけど、問題無いかしら」
「その点なら気にしなくて大丈夫だ。なあに、生徒が一人増えたと思えばいい」
結構大事じゃないのかそれは。
もはや突っ込む気力すら失くした私は、ソファーにだらりともたれながら二人の会話を聞いていた。慧音はあの人形をいたく気に入ったようで、アリスも上機嫌そうだ。結局変に思っていたのは私だけらしく、自分の感覚が正しいのかすら自信が無くなってきた。
「あとは魔力回路の容量が余ったから、適当にプリセットの動きを入れておいたわ。スイッチを入れれば一通り再生するから、暇な時にでも試してみて。両目を押せばスタートするわ」
突っ込まないぞ。
「それにしてもアリスの人形は精巧なだけでなく色々できるのだな。いや、御見それした。これからも何かあったらお願いしたい」
「光栄ですわ」
「と、話していたらこんな時間か。長々お邪魔してすまない。そろそろお暇するよ」
慧音は上機嫌なまま人形を背負って里へと帰って行った。こちら側を向いた人形の白い顔が揺れながら森の中へ消えていく様子はやはり不気味で、私の記憶にある種のトラウマとして深く刻まれたのだった。
「……慧音は行った？」
「ん、ああ。スキップでもしそうな勢いだったぞ」
私が答えると、アリスは一気に緊張の抜けたような長いため息をつき、テーブルへ突っ

伏してしまった。
「はぁぁぁ……やっと終わった……」
「えっ、おいアリス、どういう意味だ」
「自分でも流石にこれは不気味かな、とか子供が見たら泣くな、とか思いはしたけど、指定された内容を含めようとするとあれにしかならなかったのよ……」
「気に入られただけいいじゃない。もっとも替えの人形は用意しておくべきだろうけど」
「パチュリー……そうよね、私のせいで不登校児が増えてもらっても困るしね……」
おいおいおい、展開に付いて行けていないが、それじゃなんだ、私は完全に撃たれ損の蹴られ損ということか？
「その点に関しては悪かったわ。いつ慧音が訪ねて来るか分からなかったし。ひとまずその服は直すから、その辺の服に着替えてもらえるかしら」

「そういえばパチュリーは私より先にアリスの家にいたよな。珍しい事もあると思ったが、結局何の用だったんだ？」
「私も制作依頼に来たのよ。最近レミィがアンティークドールに興味を持ってね。本来なら咲夜にでも伝えに行かせるところだったけど、たまにはいいかなと思って私が来ることにしたの。この家の蔵書にも興味があったしね」
「お前のことだ、そっちが主な目的だろう」
「否定はしないわ。そういうわけだから、ビスクドールの制作をいくらかお願いしたいのだけど？」
「お安い御用よ。なんなら口から怪光線を発射できるオプションも付けるけど」
「それは遠慮しておくわ」

終わり